愛媛面影

ル 4
1311
3

門 ル4
號 4311
卷 3

愛媛面影

愛媛面影卷三

今治　半井法橋梧菴撰

○風早郡（きはやのこほり）

古ハ風速と書ヲ

国造本紀曰風速國造者輕島豐明朝御代物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定賜國造ト

日本書紀持統卷曰伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石并賜人絁四匹絲十絇布二十端鍬二十口稲一千束水田四町復戸調役以慰久苦唐地

續日本後紀曰承和六年十月癸未伊豫國人外従五位下風早直豊

早稲田大學圖書館
昭31.1.31
藏書

宗等一烟賜姓善友朝臣兼除邊籍貫附左京四條二坊天津饒速日命之後也

文德實録曰天安二年八月戊戌内供奉十禪師傳燈大法師位光定卒光定俗姓賀氏伊豫國風早郡人也及至弱冠遭父母喪服闋離俗隱居山林大同初向京華于時有聞叡山最澄大法師心持慈悲傳止觀宗三年攀陟住止觀院值衆徒屈義真和尚以為座主令講摩訶止觀得預聽最澄大法師相悲慰勞五年春正月十四日宮中齋會蒙制得度天台之度者從此為濫觴弘仁三年夏四月六日東大寺戒壇受持具足戒其後敬問大師学習宗義五年至興福寺與義延法師共論大衍宗義頗有優美之稱帝屢令光定與散位從五位下真苑宿禰離物對論經義彼此相難頗致俳優帝時以為戲弄之事最澄上建大乘戒壇之奏僧綱相共難論仍付光定返却十三年六月四日最澄卒後殊被許傳戒此光定内供奉之力也帝聞光定在山資用絶乏別賜乞食伎濟山中之急承和五年四月二日叙傳燈大法師位仁壽四年奉制起豐院天安二年秋七月帝聞年滿八十恩賞殊異施度者八人絹八十疋調布高布交易布各八十段綿八十屑錢八万貫米八十石病卒時年八十臈卅七光定為人質直不事服飾帝悅其質素殊加憐遇

三代實録云貞觀二年十月三日己卯正五位下行典藥正兼侍醫參河權守物部朝臣廣泉卒廣泉者左京人也本伊豫國風速郡姓物部首後隷京兆賜姓朝臣廣泉少學醫術多見方書天長四年四月為醫

博士兼典薬允遷為侍殿酉後累遷伊豫讃岐掾侍殿酉如故十四年
授従五位下兼伊豫掾仁壽四年授従五位上為肥前介内薬正侍醫如
故天安三年兼参河権介貞觀元年冬授正五位下轉参河権守内
薬正侍殿酉如故廣泉薬石之道當時獨歩齢至老境髪須眉皎白皮
膚悅澤氣猶強卒時七十六撰摂養要戈七卷行於世矣
類聚国史五十四人部十節婦云天長七年六月乙丑節婦伊豫國人風早直益吉女
叙位二階終身免其戸田租益吉女夫死後攀慕不止落飾歸真節
操難奪所以叙之位階用旌貞潔也

○和名抄郷名

栗井郷　河野郷　高田郷　難波郷

那賀郷

昔ハ此五郷なりしと後ハ拾四村ハ分れり

浅海本谷村三百七十七石余　浅海原村百七十九石余　下難波村六百五十三石余　中通村七百九石余
上難波村四百一石余　庄村四百五十三石余　萩原村廿七石余　尾儀原村六十三石余
猿川原村百四十四石余　小山田村三百五十石余　中村百九石余　儀式村三百十石余
庄符村二百十八石余　宋野村百九十四石余　九川村廿四石余　上總村十五石余
梅木村廿四石余　小屋村五石余　神次郎村九十四石余　恩地村三十五石余
城山村七十七石余　柳谷村百六十石余　閏谷村十七石余　猪木村三十三石余
滝本村九十四石余　猿川村三百廿六石余　才原村百九十石余　湯山村九石余
院内村百六十九石余　横谷村八十石余　大河内村四十石余　牛谷村四十石余

林鹿村 百廿石余　菅澤村 二百五十九石余　客村 百七十五石余　西谷村 二百二石余
大西谷村 六十石余　本谷村 二百三十二石余　平林村 六十七石余　小川谷村 八十三石余
佗古村 二百廿二石余　高山村 二百十八石余　善應寺村 四百六十五石余　宮内村 百三十二石余
寺谷村 百三十石余　波田村 二百一石余　神田村 百五十六石余　八反地村 八百三石余
中西外村 九百三十七石余　中西内村 三百五十六石余　北條村 四百十七石余　辻村 六百九十六石余
土手内村 九十六石余　別府村 九百九十四石余　常保免村 百八石余　片山村 百四十四石余
中須賀村 百六十七石余　夏目村 三百十石余　苞木村 二百廿五石余　常竹村 百廿一石余
久保村 九十五石余　鹿峯村 百三十九石余　河原村 百三十五石余　和田村 百六十五石余
安岡村 六十石余　鴨池村 四十九石余　磯河内村 三百六十七石余　小川村 三百廿六石余
野忽那嶋 六十八石余　無須喜嶋 二百三十二石余　栗井村 百五十二石余 忽那島ノ内　小濱村 二百十六石余 同上

大浦村 四百八十五石余 同上　長師村 二百十六石余 同上　宮野村 百五十六石余 同上　神浦村 二百廿五石余 同上
宇和間村 百三十六石余 同上　熊田村 百十六石余 同上　吉木村 百九十七石余 同上　饒村 百四十五石余 同上
畑里村 六十三石余 同上　怒和嶋 二百五十八石余　津和地島 百四十石余　二神嶋 八十二石余

総高壹萬七千六百三拾五石八斗五升六合

○烏帽子山城堀

下雑波村より一名冠山山頂より黒岩有て遠目ハ烏帽子の如し
国く名く赤樽武藏守時の長子重時と云人の城址なり
南北太平記云伊豫國立烏帽子城中條重時土居得能ゞ兵と支て
戦ひ名を紫河内の朝敵と亡ぬ云ハ今親ゝ名者

忽約を変じ敵となる程よかのづゝ城より兵出くるれば土居得能時とゆりと一万余騎にて押寄らば内より頼もるべき金子五郎左為敵より兵を城中へ入今度重時郎従十八人自害しくたて失る名

○恵良城堰

下雑波村の山上より望月六郎左為と云人の城跡なり其後河野十八将の一人得居半右衛門これを守ると云り

南海治乱記曰細川頼之大兵ヲ發シテ豫州ニ攻入ル先勢田山ノ城ヲ圍ム河野通朝防戦シテ相守ル丁数十日ニ至ル城中ニ野心ノ者出来テ通朝ヲ自殺セシメ世田山城陥ル夫ヨリ兵ヲ進テ温湯城ニ至ル此城ハ通朝カ嫡子徳若丸通堯カ守ル処十月二日細川方ノ先陣温湯城ニ取カケ矢合アリ頼之ハ阿淡ノ兵一万人ヲ以テ道後大室ト云処ニ至テ陣ヲ居河野カ與力ノ通路ヲ絶テ謀ヲ回ス國中ノ兵士河野ヲ捨テ頼之ニ服ス者多シ河野通堯與力ヲ奪ハレ温湯城ヲ守ル丁ヲ得ス捨テ高縄城ニ入ル大敵ナハ防戦不相叶捨テ恵良城ニ入ル

○腰折山

冠山の麓ニ在リ二名集ニハ冠山のるすりといふ

豫陽盛衰記ニ小野小町の歌として

いとゝ湯の河ゝ風早の腰折山をとゝるよつけくる

按此歌の詞首尾しゝゐ俚諺集ニ二句ひいてゝ多れとゝ定

おのれなるまゝなるひるの浦まんうえハもの也後人の偽作
まて小所の名なるまゝ

○風早浦

此所をすぐ〳〵汐の早き所まて紅葉へる船路の雅趣を名仏
る也和爾雅三才圖會等ハ風早鳴門とかゝる

萬葉集巻十五風早浦舶泊之夜作歌

和我由恵仁妹奈氣久良之風早能宇良能放伎敝爾
奇里多奈比家利

後堀川百首

風早の鳴戸の浦の船なれとも定めぬ波の音のみ

二名集云万葉拾穂抄ニ風速浦和名抄ニ安藝國高田郡ニ云或説ニ
駿河といふ此哥ハ新羅使の道すゝの歌なれハ安藝国可然と云
今按ニ風早郡前ハ海ニて向ニ安藝の島ニつゞくを西國北國
往来の通路なりとハ万葉新羅使の哥ハ伊豫の風早なるべし後堀
川百首の哥ハ風早の鳴戸浦ニつゞくハ伊豫ニ定定せる
按代匠記ニ備後國ニ万葉の文例と考ニ備後國水調郡
長井浦舶泊之時作歌なるべし次ニ風早の哥なり其次ニ安藝國
長門島舶泊磯邊作歌なるもの備後国なるべくなれども今備
後ニ風早浦なるもなきハ安藝も伊豫も備後ニ程近くもの
安藝國の所ニ入るべきを誤りて前ニ出るなり若ハ伊豫国ニ立事の

脫しるべし

○北條

濱辺の一在所なり河野親孝なる人住なり親孝北條大夫と称す

因て此所を小條と云と俚諺集に見えたり

按南北太平記に伊豫國立烏帽子城北條重時に居得能が兵を交て居りなどいへり疑らくは此小條が住所なんか

○國津比古命神社

延喜式に風早郡國津比古神社と祭る所は世四社考に櫛玉饒速日命也俗に頭日神社と云御社は反地村に立せり

按姓氏録に左京神別越智直神饒速日命之後也といへり又

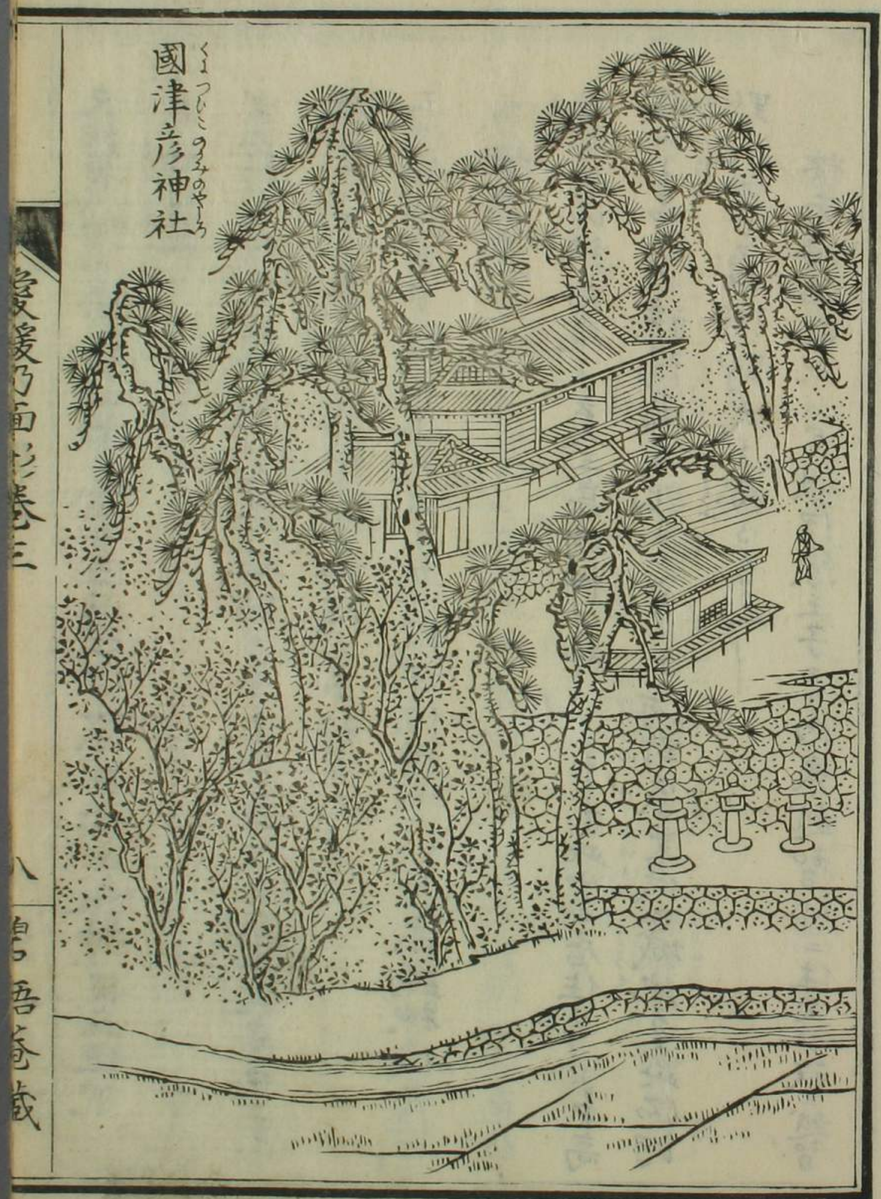
續日本後紀に伊豫國人外従五位下風早直豊宗等天津饒速日命之後也といへり此國津比古神は即越智氏風早氏等の始祖を氏神と齋祀るなり

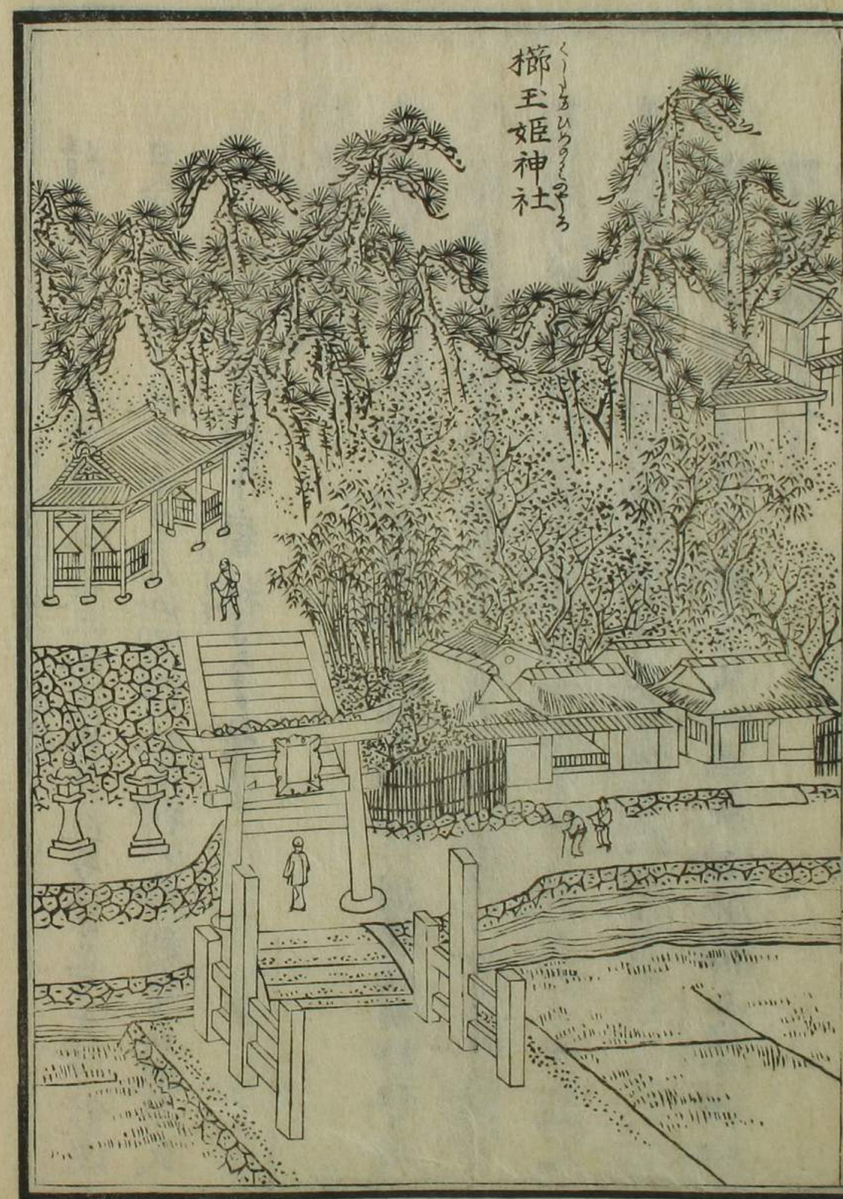
○櫛玉比賣神社

延喜式に風早郡櫛玉比女神社と祭る御社は國津比古神社と同所に向合て立せり祭る所は世四社考に神饒速日命之妃天道日女也頭日道日音相近因秘昔之則櫛玉固男神之稱而頭日今女神之号也蓋先正以夫婦合德之義更互而稱之歟といへり

大成云世四社考の説いと疑し大和國廣瀬郡櫛玉比女神社

乃ち同神なるべし


國津彦神社


櫛玉姫神社

文德實録曰齊衡元年三月壬辰授伊豫國櫛玉姫神従五位下

○高縄神社

宮内村に在て祭る所ハ三島明神なりと云春枝云慶長年中に高縄山上より遷祭る所なりて高縄山本社なるべし

三代實録曰貞觀五年九月廿五日授伊豫國正六位上高縄神従五位下

○高縄山

越智氏の祖高縄と云人三島明神の神託によりて此山に居住せしより高縄山と名くし豫陽盛衰記に云ふ河野家累代の城地なり此辺河野郷なりは河野氏と称するなり

按南海治乱記云其祖伊豫王子ヨリ以来越智郡ニ住王ヲ改ニ越智姓ヲ賜フ天ヨリ廿一代玉澄ト云人風早郡河野郷ニ居住シ玉ヲ故ニ河野ヲ以テ氏トスと云ふ

山頂に高縄權現祠あり俗に天神森と名く又横谷と云ふ寺あり高縄寺と号く觀音像を安置す高縄觀音是なり

河野家譜曰崇通清霊於一社神奉稱高縄權現後年四郎通信自彫刻父尊像安置于高縄山頂後代指彼山頂号天神森是彼尊像似菅神故傳虚名歟

天慶年中に伊豫椽純友此城に籠りしと云前太平記にかくて大手搦手都合千八百余騎純友が竹籠なる道前道後の境なる高縄城に押寄テ鯨波ヲドットゾ揚サセケルあなどるべからず

豫章記云養和元年二月西国ヨリ平家ヘノ注進ニ伊豫国住人河野奴通清ハ去年ノ冬ヨリ謀叛ヲ起當国道前道後ノ堺高縄山ニ楯籠ル間備中国住人奴可入道西寂備後鞆浦ヨリ兵船十艘押渡高縄城ニ寄セ通清ヲ討取国中并ニ阿波讃岐土佐等ヲ静ル正月二月ノ間居住ろん処ニ通清カ子息河野四郎通信高縄城ヲハ忍出テ安藝國沼田郷ヨリ兵船三十艘程海士ノ釣舟ノ体ニテ浮出西寂ヲ窺フ程ニ西寂ハ不知之去三月一日宿海ニテ室高砂ノ游君ヲ集ノ船遊シケル処ニ通信押寄テ西寂ヲ虜リ高縄城ヘ曳上セ張付ニシ切ル又鋸ニテ頸ヲ截タリトモ云　子家物語同

○紀實平墓

猿川村神道原ト云所ニ在リ俗ニ貫之朝臣の墓也ト云ハ誤ル歟宇和郡土居村田森城主紀實平ト云人都ヨリ下向の時猿川村ニて病死す依て遺骸を土居村ニ送リ下谷ト云所ニ葬リ名由宇和記ニ委ク載リ此實平ト云人貫之朝臣の同姓ナレバ誤傳ルカ

按貫之朝臣延長八年土佐守ニて土佐ニ下給ヒ事ハ古ク此國ニ来ヒしるとき〻び又此山中ニ花垣里杉本ヲ云所ニ古ク貫之朝臣の詠ヒしる哥ト云豫陽盛衰記ニ載ル是皆誤傳ニよりて附會しるの明るし

又按續日本紀ニ紀博世小治田朝廷御世被遣於伊豫国博世之孫忍人便娶越智直之女生在手云ヒしる此子孫多く此國ニ留ル

さもぞ此實平と云人も博世の子孫なんう

○善應寺

善應寺村ゟ在て元弘建武の頃勇剛の名と得し河野九郎左衛尉通治後任對馬守通盛と改む中頃數代の舊領を放さも浪宰の身となて建長寺南山和尚の弟子となて入道して善惠と号し又對馬入道と称す沖の和尚を憑み尊氏將軍ゟ申請て本領を安堵寸依て善惠入道和尚を深く尊み高縄山の麓ゟ一宇を建立して善應寺と名く北條長福寺顕正堂和尚ハ南山の弟子なれバ招請て開山とすと云此事豫章記ゟ詳なて高僧傳作崇壽寺南山和尚將軍家古今台狀數通并河野家累代の書扎寄附狀等枚挙すべ

○椎甲木森

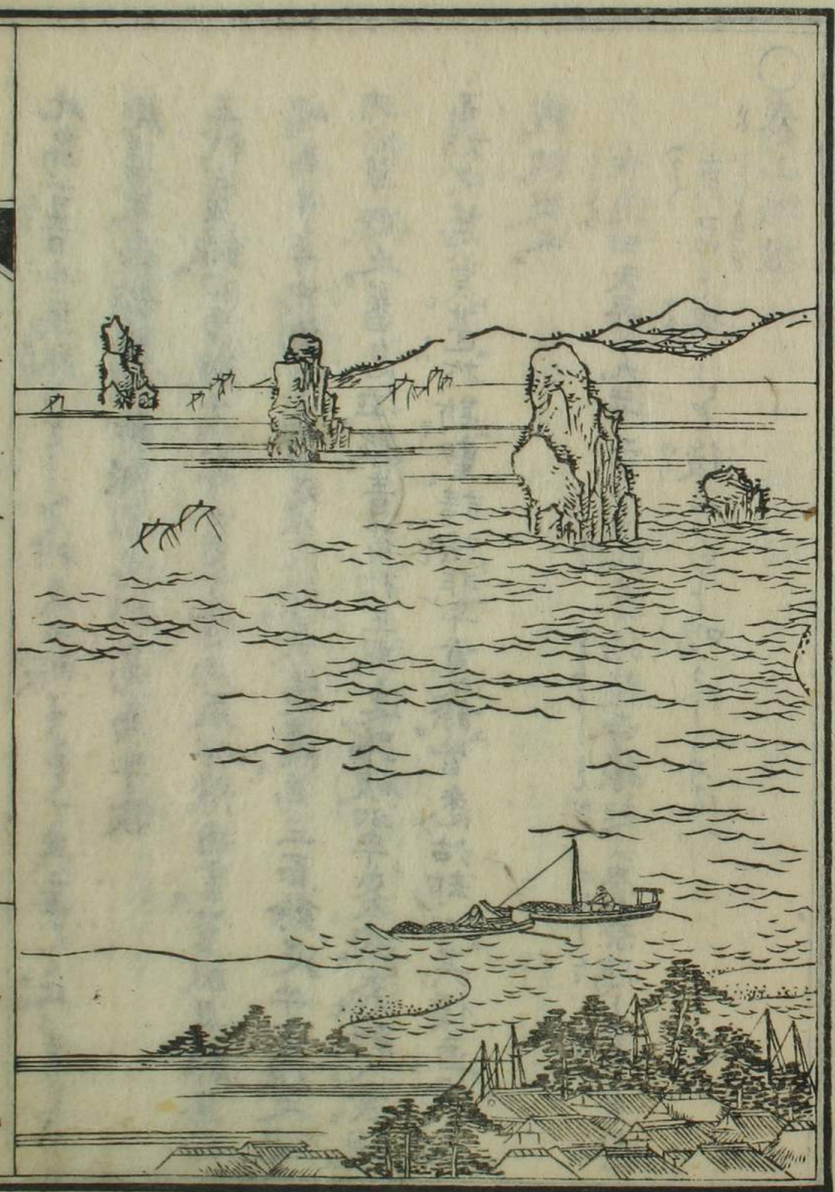
河野對馬守通盛の城跡なて此山ゟ名石切て方ゟして柱の如し長五間ゟ十間ゟ至る一山皆ゟの石なりと云

○宗昌寺

八反地村ゟ在て禅宗黄蘗派なり河野親經卿北條六郎康孝子正岡信濃守經孝建立也開山大蟲禅師此郷なて十六箇村寺領なり名田旧記ゟ出と云

○忽那島

北條の沖中ゟ在り俗ゟ中嶋と云此島十二浦有り昔時二階堂信濃民部入道此島ゟ謫居せり子孫忽那を氏とすと俚諺集ゟ見り



鹿島
ゑのしま
北条

此島古昔牛馬牧ありしを村民の訴によりて其事を止めしむ
延喜式兵部省云伊豫國忽那島馬牛牧
三代實録曰貞觀十八年十月十三日丙辰伊豫国言管風早郡忽那
嶋馬牛年中例貢馬四疋牛二頭其道遺馬三百餘疋牛亦准之嶋
内水草既乏蕃息滋彰青苗初生風逸蹈破羽率変將秀群入食損
百姓之愁莫甚於斯望請換非年貢之餘皆悉沽却以其價直混合正
税詔從之
玄道曰天平九年二月に記せる法隆寺縁起に胷奈嶋と書りて忽
○泰山城堰　京ハコツと唱へ後に多と唱へ来るべし

忽那島に在て忽那式部少輔と云人の城跡なり
二名集云元亀三年九月六日土州元親發大軍攻入于守和郡自湯
月舘式部少輔久津名通著為兵將被差向伊豫喜多両郡及
嶋方之輩八百餘騎同八日首途當城分軍於水陸進發
○鹿嶋
北條の海上に在る小島是也此島に鹿島明神の社ありて因て名
く島中に鹿多く久留嶋出雲守の砦よりて二神豊前守相
義と云人住る由二名集に見りて
此外野忽那無須喜等の嶋々皆風早郡に属りて

○和氣郡

和名抄郷名

高尾郷（タカヲノサト） 吉原郷（ヨシハラ） 姫原郷（ヒメハラ） 大内郷（オホウチ）

昔ハ此四郷なりしと今ハ二十二村ゝ分れたり

堀江村八百三十二石余 大内平田村四百八十五石余 谷村三百八十三石余 櫂現村三百五十六石余

福角村八百三十九石余 大栗村三百三十七石余古小栗木 上伊甚村百六十六石余 下伊甚村五百四十四石余

祝谷村五百十七石余 吉藤村六百七十七石余 姫原村九十石余 山越村千百十八石余

長戸村千五百四十七石余 志津川村四百五十七石余 高木村三百五十七石余 安城寺村千百十六石余

和氣濱村百五十五石余 太山寺村千五百十六石余 古三津村千八十三石余 久万村五百九十六石余

興居嶋四百二十余　馬木村七百六十六石余

總高壹萬四千二百四拾六石壹斗二升六合

○葛籠葛城塁

堀江村ニ在り村上内藏大輔吉高と云人の城跡なり

二名集ニ云元亀三年九月十二日濃州織田信長公家臣山岡對馬守平手右衛門率一千七百余騎以三好将監同右京為案内者分軍二列漕寄于堀江濱囲當城村上吉高雖防戦力労失盡臨半更抜落云

○花見山城塁

同所ニ在り正平二十三年久枝四郎入道當城ニ立籠しと湯月舘を攻撃て落城すと二名集ニ見ゆ

○常信寺

祝谷村ニ在り本尊釋迦如来真言宗中興天台宗ニ改ゆ此寺蒲生秀行朝臣の位牌なりと云

寺内ニ四河の如きものなり里民疾病を祈るニ必霊験有り神佛の堂舎もるく如何る故ゆえなるべし俚諺集ニ見ゆ

○客天神

同所ニ在り菅公筑紫ニ左遷の時暫此ニ居ましまし因て客天神と云ふ此事窪田天神の処ニ詳ニ俚諺集ニ窪田

天神の勸請なりと云り中興再造河野通能と云く明德四年
棟札に誌るし後加藤喜明朝臣の修覆云るし別當飛
梅山安楽寺圓盛寺と云

○三木寺城堤

同所に在り宝德三年河野通元男犬法師此城を死す白馬に駕い
武者の像有て山上に安置せる俗誤て愛宕權現なると云と二
名集に見ゆ

俚諺集云城主犬坊月毛馬に駕て谷より墮て死りその後崇り
を為し幽魂白馬に乘て往来するの云是に遇者必病を
松山臣大膳清大夫と云人君命を蒙り甲冑を帶し薙刀の鞘を
脫し馬上にて城山の禁に至り犬坊の霊を去べき君命なりと高声
に述るとハ白紙の如き物東に飛去るを見しが其後ハ怪事なし

○三木寺

異木三本ありにより三木寺と云ぞ又一名御幸寺と云城主犬
坊善提の為建立しなる由俚諺集に見ゆ
此寺の禁に岡本大明神と云社あり
按古昔帝王の御幸ありし地なるよりて御幸寺と名付られ
ハ岡本宮ハ即舒明天皇を祀奉るなり

○輕墓

姫原村に在り小高く築立て小笹など生り即輕皇女を葬し

處なりと云因て此郷を姫原とそゝぐ

日本書紀允恭巻曰二十四年流輕大娘皇女於伊豫

○龍穏寺

山越村に在り禅宗洞家也河野家五十一代越智通直出家して剃居を営梵利とゝして竜穏寺と名け自開山となり海岸希清大和尚と稱す二名集に見り此寺の宝物に蜀江錦にて縫ひし五條の加衣沙衣なり

河野家数十代の石碑を建立寸延宝七年七月十五日河野家五十七世播州宇佐崎河野彌大夫通正建立と誌り

○十六日櫻

竜穏寺山に在り毎年正月十六日花を開く名木なり

古事因縁集云昔此山に花を愛する翁ありて老後に及く春咲花も心せよ我齢已に八十に及へり然はよ逢ひ難しと恨なに獨言て立れば花忽開く是正月十六日なり夫より今に至る毎年昔に至て必ず花を開く草木心なしとは共愛情に感ずるやとそゝぐ

感涙を催す又世に帝温泉に浴し給ひ序世に行幸ありしに

恐いまだ咲ぬ中意なく還幸なり後に中すに付急ぎ

輦をとゝめ世に出てその坂を今に車返坂と云と俚諺集に見り

冷泉為村卿此花をよみ給ひ

初るのゝ花の梅めづらしや都のゝあれてなるのさくら

慶應元年正月脇屋義一ぬし松山少將の命ぜらるゝ賜り名
とそ世花を見せ〳〵歌ふ人もなれば　松菴
なれ〳〵獨さらんなれてふ言を伺ひて春のそゞめよ

○天德寺
山越村ゝ在り禪宗濟家也河野刑部大輔通宣建立なりと云通宣
永正十六年卒画像今猶存すと二名集ゝ出る

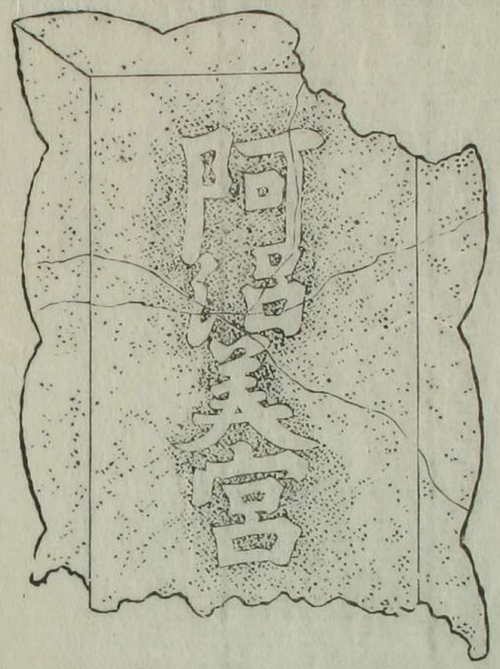
○千秋寺
同所ゝ在り萬歲山と号す禪宗黃蘗流也元禄元年戊辰歲の建
立なりといつる

○還熊八幡宮
同所ゝ在り石清水の勸請なり旅行する人此社ゝ詣ぬれば必恙なしとて
来たり信ずる人多し還熊と云名ゝよるなるべし

○七郎明神
馬木村ゝ在り河野七郎通運の靈を祭るゝ河野通治の男
七郎〳〵云人大高次郎重成が為ゝ討死すと太平記ゝ出る

○阿沼美神社
延喜式ゝ温泉郡阿沼美神社名神大と云ひて二十四社考云所祭
神未詳在地未詳ト部兼永曰沼一本作治臨時祭式作阿治美
神社按美與女通阿治女也是則天鈿女命御名也
和氣郡平田村ゝ一社ありて近年社前の川を堀て石頭を掘り出し額

石額正面之圖



既五九三尺横二尺許

阿沼美宮得石額之碑

式内名神伊豫國阿沼美神社者室町氏以還海内戦爭屢經兵燹祀典淆乱失其名號不可得而知者数百年矣和氣郡大内郷百一社號曰新宮會社前橋壞里民聚修之穿地丈餘偶得石額刻曰阿沼美宮實天保四年癸巳秋九月六日也於是始知為其社矣即聞于官越五年甲午春藩命奏之

同裏面之圖

石面諸〻て火よ羅〻物の如文字定る〻ことて延文の年号之ゝ

天朝遂乃賜神宣告文及幣帛然後式内名神伊豫國阿沼美神社者依然復其舊昌矣於戲是豈方今天下和平國君仁明萬民豊樂之瑞祥也歟因勒之石以表于後昆係之以銘曰

雲霧時蔽　靈光未昧
一片石額　以徴後代

松山藩大高阪亀謹撰

面ゟ阿沼美宮の四字を彫ル国く朝廷ゟ訴ゑ勅有て此一社を阿沼美神社と定ム給へり

按年久く埋ル神の再世ゟ出ス珍玉一ふくりめ[illegible]ハ[illegible]

或云神名帳ゟ温泉郡と[illegible]を和氣郡ゟ掘出し石額甚疑し

ハ彼此入易り事ゟ多し[illegible]乱世打續キ[illegible]バ

心なき武士ゟ[illegible]ゟ尊き神ゟも知ず社ゟ[illegible]ゟ敷ちらし[illegible]ぬ

ゟ移ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ定ム

[illegible]ゟ今ハ朝廷ゟ定ム給ふとや

大成曰松山城下ゟ味酒村三嶋社ハ式外の神ゟて越智郡の三嶋明神を移祀ゟ此阿沼美神社ハ味酒の三島ゟ[illegible]ハ妄説ゟよし

或書ゟ[illegible]

春枝曰温泉郡江戸山ゟ阿沼美墓ゟ云所ゟ此処必舊地ゟ[illegible]

又按式内何宮ゟ[illegible]ハ天皇を祭る宇佐宮ゟ[illegible]の外ハ皆何神社ゟ[illegible]

[illegible]宮ゟ[illegible]ゟ早く延文の頃ゟ誤書ゟ見ル後

世天満宮東照宮ハ特賜の号ゟ[illegible]其外ハ皆某社ゟ

[illegible]某宮ゟ[illegible]ゟ式内の社ゟ[illegible]ず

○延命寺

和氣濱ゟ在り真言宗本尊阿彌陀佛立像長三尺五寸四國順拜

五拾三番の札所ゟ

○太山寺

太山寺村ゟ在り竜雲山護持院と号く真言宗本尊十一面観音長六尺二分行基作四国順拝五拾二番札所也

俚諺集云豊後國内山長者と云人上京の事有りゟ高濱前まで難風ゟ度び海上安うず仍て堂宇を建立せんとを立願せば波風忽穏なる是ゟ依く天平五年六月十八日此堂を造営寺と云又一説ゟ

此本尊久米郡志津川村北方村ゟ在りと云孝謙天皇天平勝寶元年八月十八日勅願所と再建七堂伽藍六十六坊の大浄刹と成丑て其後世この帝王一代ゟ觀音一體宛安置玉へり中頃回禄後後冷泉院康平五年再建有る時も先例に任せ十一面觀音を造加し玉へり夫ゟ後三條院延久元年堀川院寛治元年鳥羽院天仁元年崇徳院大治元年近衛院康治元年後白河院喜元二年ゟ御門院奇瑞の事有て文明十七年再興有り其時願主河野刑部大輔通直三重寶塔を建立すと云

○蓮花寺

空岡山ゟ在り薬王院と号く本尊薬師如来天平五年六月十七日里人此山頂ゟ佛像を見る何處ゟ飛来いるる佛体なりと云ひ寺異の思とを〻山の半腹ゟ下りて合掌礼拝す仍て其処を礼拝坂と云時ゟ行基法師行脚く此ゟ至り光明を尋て此像を拾ひ即堂宇を建立く佛体を安置す今の薬師是なり夫ゟ貴賤男女参詣すく〻影く〻と俚諺集ゟ見ゟ

按天子寺中行基法師諸國ヨリ行脚〳〵佛寺を造立す或ハ佛体を土中ヨリ埋置て夢想ヨリ託〳〵掘出し又ハ山巔ヨリ捨置て空中ヨリ飛来〳〵如くいひ為〳〵愚民を欺くのみすべ畏くも天聽ヨリ達〳〵聰明を晴し聖智を惑〳〵奉ひらの愁ひ〳〵是等小児の戯ヨリ似たれども上世の人質直ヨリして彼ガ誣事ヲ信ゼ〳〵嘆ヨリ餘ルベシ〳〵

前松山城主加藤喜明朝臣の免許状有り其文曰

室岡山ヨリ方へ須置申ハ写木茂り悪ヒを下刈せも宜様ニ

一ノ付者也

寛永三年五月廿七日　加藤左馬助喜明判

室岡法印

○西法寺

伊豆村ヨリ出る本尊薬師二體有一体ハ立像恵心作一体ハ座像ヨリて

最澄作也と云延暦十一年河野家建立ヨリて開基辨豪上人昔時ハ

七堂伽藍二十二坊有しを焼失後今の地ヨリ遷す舊ハ仁王門ヨリ十

八町奥ヨリて今の寺ハ廿二坊の内十藏坊ヨリ云

○三津濱

松山城下ヨリ一里餘西ヨリ在り古三津ヨリ此所ヨリ移ルヨリ云

舊蹟考ヨリ三津の三ハ例の假字ヨリて古大御船の泊しヨリ所ハ御津と

ハいふべし〳〵ヨリて南海治乱記ヨリ河野通直豊前國根津浦ヨリ出船

興居島
濁音ニ唱ルハ誤リ
一名いよのこしま
伊豫小富士

為さまに
よろこび
國ぞ
ひろまる
ねぐの
ゝ根と
ちゝに
摸して
桂菴

て豫州御津濱ゟ渡りなど見ゝとば舊ハ御津と書るゝ〳〵

按日本書紀ゟ御船泊于熟田津石湯行宮又万葉集ゟ熟田津尓船乗世武登月待者などゝ熟田津ハ此処なるべ〳〵そ温泉ゟ行幸し時御船泊玉ひゝん江外よりなぶるを里人云昔ハ湯の江ゟ海を入海なりを築留て今の如くなりぬと宮ゝさもなりゝん

ゝれど御津と云名ハ御船泊玉ひしよりその名なるべゝれば古の熟田津也といゝんも誣事ゟハなれど猶世ゝ温泉の條ゟ

なるべし

○興居嶋

三津濱の海上ゟ在り其形容富士山ゟ似ゝと仍て俗ゟ伊豫小富士と云

宇都宮の黨数代此島ゟ據ゝり又南海治乱記ニ奥居嶋ゟ得居攝磨守など見ゝき

殘太平記云奥居嶋城主宇都宮遠江守モ内ニ長曾我部元親ト内通シ世度人質ヲ送遣シ降參セシ程ニ元親得大利早ニ土州ニ帰陣ス

又云宇都宮西園寺敵ニ組スト聞シカバ當国太守河野兵部少輔通直驚其勢五千余騎永禄十一年八月十五日追手搦手海陸操合セ奥居島ニ押寄タリ宇都宮遠江守元綱兼テカクト軍慮怠ラズサレバ頼ヲ撰ル菅田隼人正猶之ゝ大津城ニ籠居手勢僅ニ千余騎一場必死ト楯篭ル寄手ハ城ヲ圍テ日夜攻上ル城内究竟ノ射手鉄炮練磨足軽共放ツ玉箭人ニ中サヽハ馬ニ中リ寄手討死手負数ヲ知ズ云ゝ

又云宇都宮ノ両黨相伴ニ此奥ハ居嶋ニ住居メ二百余歳単ニ是河野氏ノ恩幸ナリ

按豫章記豫陽盛衰記等皆云和氣姫此島ニ居テ三子ヲ産ス茅三子小千御子是也母ノ居ヲ嶋ヲ嶋ト云ルヲ後ニ奥居嶋ト改ムト是後世附會妄説ニテ固取ニ足ラズ我國上世詞ハ文字ニ文字後ニ假ニ生ルヲ所謂假字也其後字ニ就テ理義ヲ立ルハ皆非ルヲコヽハ凝堅ルヲ成出ル意ニテ万葉三長屋王哥ニ般若金之凝敷山乎超不勝而ゝ云ル如ク己ノ凝堅ルヲ高ク成出ルヲ凝ヲトヽバ此コヽ嶋モ高ク成出ル意ニテ付ル名ルヲ著シキヲト假字ニ興居ト云字ヲ書ルヲトテ云ル無

秘言ノ妄言ヲ唱テ後世ヲ誤ルモノヲ此類尤多シ

又按伊豫高嶺ト云ハ赤人ノ詠給ヘルヲモテ後世ノ奇ヨモレ

れ云ヲトヽハ山ヲ定ル證ヲ求ルハ石土ヲ云山ノ此

國内ニ最高キ山ヲレバ折つけヲ舊蹟考ヨモ

ヲ嶋山ノ宜シキ國ヲ伊豫ノ高嶺ノ伊左庭ノ岡ニ

疑フヲモテ己ノ所ヲ思ヒヨルヲ事ヲ彼赤人ノ詠ニ

若此奥居嶋ヲハ高キ山ヲ求ルハ遠ク大ヲ形

冨士ノ高嶺ニ甚ク似ルヲトヽバ伊豫ノ高根ヲハ詠ヲ人ノ

さてはそ伊左尓波のこつぎふもすりてきこゆれ又此谷よ
こゝきとよあるとも奥居嶌と八名付るもいとん後世ヨ伊
豫小富士と名つけるもいよ〳〵高嶺と云意なるべしまれゝこ八定
ていつよいとうずふ思ひすれるまゝヨ試ヨいふるさ

○温泉郡　和名抄ヨ湯郡と訓り後世オンセンと唱ふ八訛なり

續日本書紀高野卷ニ曰神護景雲三年夏四月壬寅伊豫國温泉郡人正八位上味酒部稲依等三人賜姓平郡味酒臣

三代實録ニ曰貞觀三年九月廿六日左京人大内記従七位上味酒首文雄山城少目従八位下味酒首文王文章生無位味酒首文宗等三人ヲ賜ニ巨勢朝臣

大成云味酒郷より出し氏姓なるべし

○和名抄郷名

桑原郷　埴生郷　立花郷　井上郷

味酒郷

昔ハ此五郷なりしを今ハ四拾九村ゝ分ヒとし

味酒村八百八十四石余　衣山村三百七十四石余　山西村八百三十八石余　別府村六百十二石余

齋院村千四百卅五石余　高岡村千二百五十石余　北吉田村四百七十二石余　南吉田村八百廿三石余

久保田村三百十三石余　冨久村四百七十八石余　針田村六百五十石余　土居田村千百十六石余

南江戸村千九百十三石余　北江戸村七百七十四石余　竹原村九百十九石余　小栗村四百九十石余

藤原村四百九十五石余　立花村六百卅八石余　中村四百十四石余　小坂村四百卅三石余

枝松村四百五十四石余　樽味村三百五十二石余　桑原村六百三石余　新百姓村百卅一石余

松末村百六十九石余　三町村百六十石余　畑寺村四百卅石余　正圓寺村三百四十石余

東野村三百六十石余　溝辺村三百四石余　石手村五百五十石余　道後村千三百十六石余

持田村八百十石余　市方村三百五十三石余　湯山村千二百六十六石余　澤村湯山高之内下同

柳村　末村　食塲村　高野村

杉田村　別府村　川江村　福見川村

宿原村

總高二萬千八百拾五石九斗五升四合

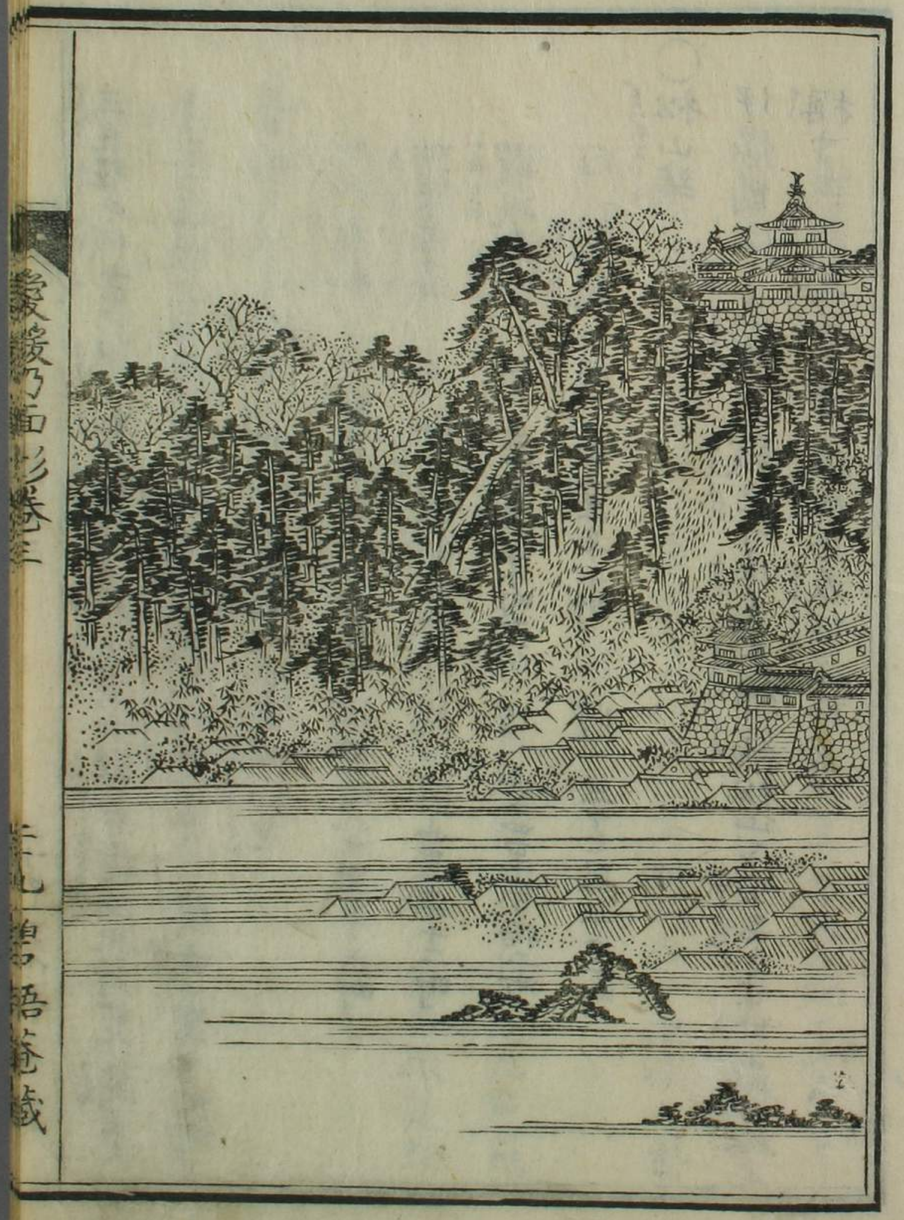
○味酒明神

味酒村ゝ在て三嶋明神を祭る味酒ハウマザケの約言なるとミサケと唱るハ訛なり此神社舊ハ勝山ゝ在しを慶長七年壬亥歳加藤庚松前城を勝山ゝ移し松山と改られし時今の所ゝ遷るとゝ云

按此味酒明神を阿沼美神也とするハ妄説なるをハ舊蹟考に完戸矢成が按已に阿沼美神社の條にいへるがごとし

○松山城

此山平田曠野の中間に特立して海岸を隔る事二里許南方に石手川の流あり東北ハ山遠くして巔に五重の天守を築き二丸三丸あり東北に大手此大城戸を構へ北の山腰に高石垣を築立櫓を構て矢狭間鉄炮狭間其数を知ず要害堅固にして甚遠望の風景殊にめでたし慶長八年加藤左馬助喜明朝臣松前城を移給へるにより舊ハ勝山といひしを後に松山と更めて云並請ぶ全調ずるに加藤侯ハ四拾万石を賜り奥州會津に移玉へり寛永四年蒲生秀行の次男中務大輔忠知朝臣出羽上山四万石より二拾万石を加増して此城に移玉へり夫より八年にして同十年甲戌歳八月十八忠知朝臣京都にて卒し給ひ無嗣子邑除と除邑録に見へ同十二年乙亥歳東照神君異父同母の御弟久松佐渡少将定勝朝臣の世子松平隠岐守定行朝臣拾五萬石を當城を賜り伊勢桑名城より遷し給ひ同十九年此城を修営して五重天守を改て三重と為玉へり夫より数代連綿して相續して玉へり其後雷火して天守焼失して近世再建して玉へり城下の町数七十一町家数千七百三十六軒と俚諺集に誌せるが近世人家ますます繁栄して此國第一の都會となるなり



松山城
石手川

三丸堀の戌亥の隅より制札場乃ち札辻と云諸方道法此所より定る
東武へ海陸二百拾八里二町三拾九間也内城より三津迄一里十七町
三十間大坂迄船路八拾三里迄國への道法如左

土佐高知　陸地廿五里半三十八間　船路百八十里半六町
阿波德島　同　四十五里三町卅七間　同　七十四里半十二町
讃岐高松　同　三十七里半十町五間　同　四十四里半拾二町
同　丸亀　同　三十一里半十町　同　三十七里半十二町

○松山縞

伊豫國伊と木綿を織出す中よ木綿縞松山を上品と寸世よ松山縞と稱す其精巧なる事他國の及所よりすぐ

按伊豫國古昔八綾羅等の絹を織て貢獻せしと今八絶て此事なし
續日本書紀元明卷云和銅五年七月令伊勢尾張參河駿川豆
近江越前丹波但馬因幡伯耆出雲播磨備前備中備後安藝
紀伊阿波伊豫讃岐等二十一國始織綾錦
延喜式主計云、伊豫土佐右二十九國輸絹調両面五疋九點羅
二疋窠綾二窠綾各六疋小鸚鵡綾二疋七窠綾八疋薔薇疋緋
四疋緋帛四十五疋縹帛十疋皂帛五疋白絹十疋

○温泉

さ後山の麓下に在り往古八熟田津石湯といひしと云ふ道後の
温泉と云此さ境こそ八千家物語源平盛衰記等に道前道後の

境内高縄山と号して山西をすぐ後に比叡を松山と号城下の名となる称く今八温泉の郡の名とのゝ事ぬ此温泉八神代より始りて代々の帝王行幸せ給ひ玉ひ殊に効験他の温泉に勝れば浴する人千里を遠しとせず此辺より昔八幾所も湧出ゝ玉ふ湯桁と号ふ物を架し浴室を設く

六花集ニ

伊豫の湯氏湯桁の社八尤や川辺八の中八十六

新葉集ニ

神垣ふかい社ゆゑの名なれるで見れば見て見ぬ

源氏物語宝物の巻ニ

そゝ[illegible]

そゝ[illegible]伊豫の湯桁と書[illegible]

書[illegible]

玄道云催馬楽歌ニ以与乃由乃由介多波伊久川伊尤之良須也

[illegible]

按今も諏訪の温泉ゑ八驛中江湧出ゝ旅人の宿ニ別る

湯を[illegible]

[illegible]八一棟ニて上中下の三等ニ分て[illegible]又養生湯ニて[illegible]の湯

の流[illegible]を一處ニ港を少将定行朝臣の建立ゝ[illegible]

釋日本紀曰伊豫風土記云湯郡大穴持命見悔恥而宿祭毘古那命

欲活而大分速見湯自下樋持度来以宿祭毘古那命而浴漬者暫

間有沸而起居然詠曰真暫寢哉跡處今在湯中石上也凡湯之貴
奇不神世時耳於今世染疹痾万生為除病存身要藥也天皇等於
湯幸行降坐五度也以大帶日子天皇景行天皇與大后八坂入姫命二軀為
一度也以帶中日子天皇仲哀天皇與大后息長帶姫命神功皇后二軀為一度也
以上宮聖德皇子為一度及侍高麗惠総僧葛城臣等也于時立湯
岡側碑文記曰云云以岡本天皇舒明天皇并皇后二軀為一度也于時於大
殿戸肯椹木云臣木於其上集鵠云比米鳥天皇為此鳥繫穂等羨
賜也以後岡本天皇齊明天皇近江大津宮御宇天皇天智天皇淨御原御宇
天皇天武天皇三軀為一度此謂幸行五度也
俚諺集云景行天皇の行在所八今の明王院北の岡山也仲哀天皇の

行在所八今の八幡宮の禁麗也聖德太子行啓の所八八幡宮の西乃
禁下也舒明天皇の行在所八橘村也
智天皇天武天皇三帝の行在所八湯より八町西北の山禁下也齊明天皇天
古事記下巻曰故其輕太子者流於伊余湯也
按湯字疑八衍字にして輕太子を流ーハ宇麻那よりの誤也
今も殘りぬる猶些ゝ八考ふるに一巻より載り
日本書紀舒明巻曰十一年十二月幸于伊豫温湯宮
同十二年四月天皇至自伊豫便居厩坂宮
扶桑略記巻曰舒明天皇十一年十二月幸於伊豫温泉宮時大風雨
同村上帝天暦七年三月廿日己亥權少僧都明珍申給官符向伊

豫國温泉治病

日本書紀齊明卷曰七年正月庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮熟田津此云伊枳陀豆

万葉集三卷山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首并短歌

皇祖神之神乃御言乃敷座國之盡湯者霜左波爾鉾在嶋山之宜國跡極此疑伊豫能高嶺乃射狹庭乃嶺爾立之而歌思辭思為師三湯之上乃樹村寸見者臣木毛生繼爾家里鳴鳥之音毛不更遐代爾神左備将往行幸處

反歌

百式紀乃大宮人乃飽田津爾船乗将為年之不知久

大成云伊豫の高嶺の射狹庭乃岡とよめるいと心得しゝ所の高根といふ延の岡と八程遠く隔りたる温泉郡の玉井某和田某なども已もいぶかしく思ひて熟思よさくもあらずおもはるゝ海をよみあるて嶋山のすゑつ國とて伊豫の高嶺を遠よそ放又近き彼岡をとゝや心意をんの古言の味をやとるゝ海とくよみあるもとれなるべき世もそのもしるべし

日本書紀天武卷曰十三年冬十月大地震時伊豫温泉没而不出俚諺集云慶長十九年十月廿五日大地震湯没して出ず其後湯神社前より神楽を奏し祈て湯湧出る事舊の如し貞享二年十二月ト日大地震泥湯湧出後より清湯と成宝永四年十月

四日讃州大地震温泉没して不出仍て湯神社に於て神楽を奏し社造補ひて玉垣かし渡し朱鳥居建立道後町中より千本の神木を御山の禁下に植玉石に仮殿を営み奉幣祈念怠事なし翌年正月廿九日九百四十五日を経て涌出四月朔日より舊の如く浴するのを得是より霊泉いよ〳〵新に妙験古に倍り又安政元年十一月五日申中刻過大地震温泉没〳〵不出例に依て湯神社に神楽を奏して祈念す翌年正月末より涌始て二月末より湯となる三月末に至て再舊の如し

慶長十九年より安政元年迄　二百四十一年

寛文二年より　同　百九十三年

貞享二年より　同　百七十年

寶永四年より　同　百四十八年

○温泉碑

是厩戸皇子温泉に行啓の時建給ひし乃也されどいつの頃より埋て見えず碑文のみ釋日本紀に見えて其文曰

法興六年十月歳在丙辰我法王大王與惠総法師及葛城臣道遥庚與村正觀神井歎世妙驗欲叙意聊作碑文一首惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給万機所以妙應百姓所以潛扇若乃照給無偏私何異于壽國隨華墓而開合沐神井而瘳疹詎殊于浴花池而化溺窺望山岳之巍嵬反冀子平之能往

椿樹相蔭而穹窿實相五百之張蓋臨朝啼鳥而戲吐下何曉乱音之聒耳丹花卷葉映照玉菓珍葩以垂井經過其下可優遊豈悟洪灌霄庭意與才拙實慚七歩後定君子幸無蚩咲也

按法興舊本作弘興ならん大和國法隆寺釋迦仏光背銘ハ法興元卅一年歳次辛巳十二月云ヘと有法興六年丙辰より推ル今年辛巳卅一年ヨ當ルヒハ必法興ならるべき逸文風土記の信友ノ按ハ從て改めり機舊本誤在應上舛作升浴作落窿作窿華作草今皆從或書改之然ルとも語意猶鮮ク紀所ノ記猶後人の考をまつ

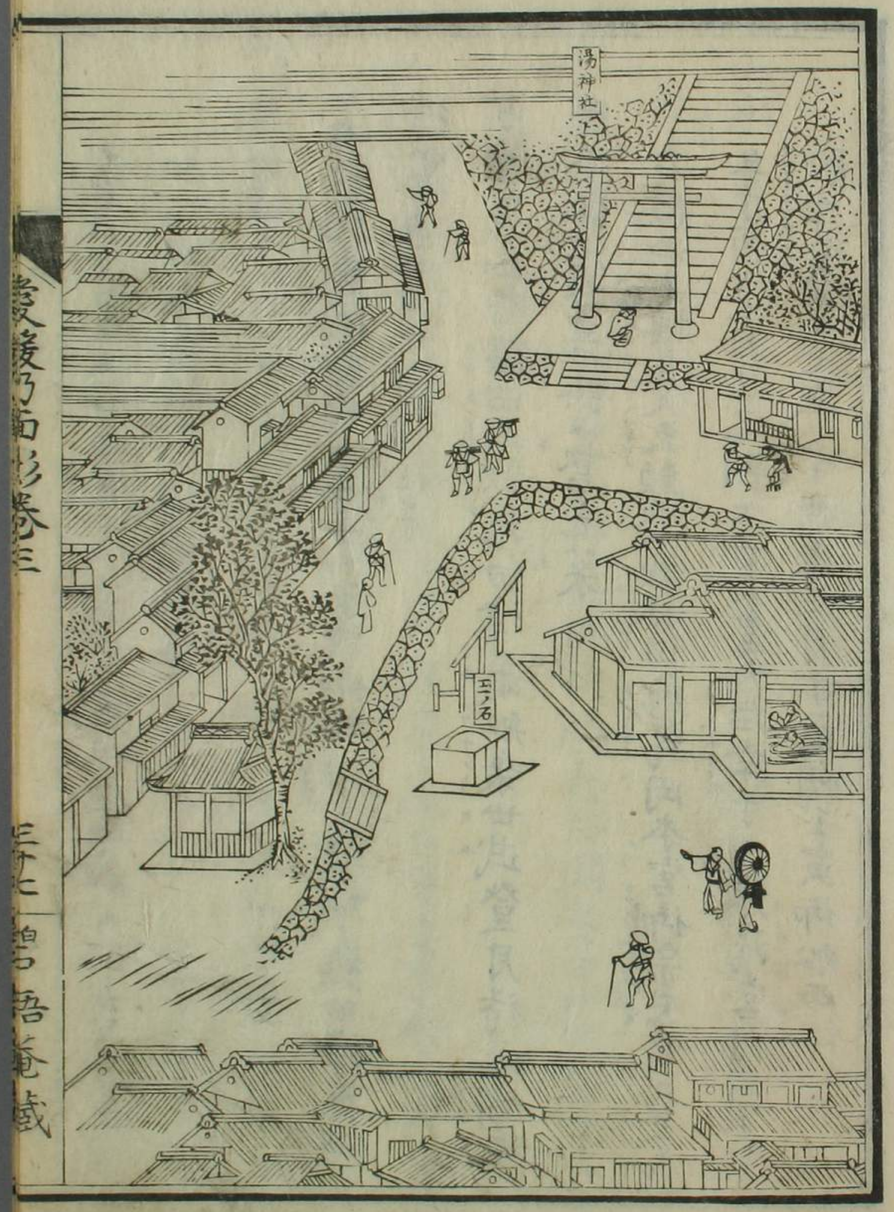
橘春暉ノ北窓瑣談曰寛政甲寅春伊豫國道後温泉ノ側ニ畑アリテ昔ヨリ土民ノ云傳テ不淨ヲ忌ムモシ此畑ヲ汚ス時ハ祟リヲ得テ寒熱ヲ發ス今年松山某考三ノ此中ニ必聖德太子ノ碑アルベシトテ人シテ掘シレニ果メ大ナ碑石ヲ掘出シタリサバコソトテ未タ全ク出終ラズ前ヨリ水ニテ洗ヒナドシテ見タリシニ聖德太子其昔温泉ヘメサレシ時ノ御文章見タリシニソノ時隨從人ノ姓名ヲ載タリ稀代ノ珍物也トテ喜ビ掘タリシニ温泉ノアタリ近キ土地ヲホリ穴ニセシ故ニ温泉中ヘ濁リユキタリシカバ所ノ人大ニ驚キ若シ温泉ニ別条アル時ハ此里ノ人民數百人飢渴ニ及ブベシ此碑掘ルヿ無用ナリトテ皆ミ戒メ止メタリシカバ又ヲノヽニ埋メタリイト殘多キヿトリキト此アタリノ人語リキ

舊蹟考曰或書云嗟乎聖德太子所撰之碑文尚埋没而不知所在曾聞鄉民披山間莽茸斷金地數尺得一古碑憚人怪異之私還塡之云此温泉近境則果為夫古碑不可誣也可痛惜焉温泉之東南有古城址其東北之岡通俗呼伊社尓波有一院堂安藥師室龕直地架地翕扉不便于闔闔釘着深秘鎮之口碑傳之此像毒石也從地涌出礦子不技若直視之則毒氣射眼乍瞽云所以幾百年歷住之僧侶不容瞻禮也議者云是必夫古碑或碑上鐫藥師之像而不称碑以像稱乎若果然則只恁麼地蘊覆去也可太惜也

按古碑の埋没ハ誠ニ惜ムベシ〳〵義安寺の藥師果〳〵碑

ニ秘ルベキ物ニハアラズ速ニ扉ヲ開キテ疑ヲ晴ラスベシ〳〵扉ヲ開キバ眼盲ルベシトハ例の法師の詭言ニ〳〵必ラズ理の有キ事ハトヽ砒石ニアラズトモ見ル〳〵眼の盲ルヽヲ恐レバ殊ニ此龕モ開ケテ古き物ニアラズトモ見ル〳〵贋ト云ンヤ然ルニ匠モ造出んヨシヲ云ヒテ造出サヽレバ云ヒ言ヲ新ニ造出サヽレバ云ヒ言ヲ事明ラカニセヨ

服部元喬ガ温泉碑文中ニ云自寛永中松山侯食封伊豫國温泉在疆距松山治城東北二十里於是累世尊崇其湯及神祠及今矣源定喬刻石紀其事志傳永久乃典故所列足以徵文獻矣と其温泉の功德を賞せる甚詳なるかな


湯神社
五ノ石

道後の温泉

てはせをもて太子の撰ようて建し憾らくハ此碑もいまだ建す
全文南郭文集三編に載たり

○熟田津

日本書紀齊明巻曰七年正月庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮 熟田津此云儞枳陀豆

万葉集一巻額田王歌熟田津爾船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜

右撿山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥岡本宮御宇天皇己丑九年丁酉十二月己巳朔壬午天皇大后幸于伊豫湯宮後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路庚戌御船泊于伊豫熟田津石湯行宮

同三巻山部宿祢赤人至伊豫温泉作歌百式紀乃大宮人之飽田津爾船乗将為年之不知久

同十二巻悲別歌柔田津爾舟乗将為跡聞之苗如何毛君之所見不来将有

舊蹟考に曰土俗の傳説に昔ハ温泉の地名をあきたといひしときゝ田津ともいひ又まき田津とも云湯の辺ハ海にて船つきあるゆへ今ハ地脉変じて二里ばかり西に陽りぬれバ田津の如き田津にきゝ田津を合せて云津といふなりなど或書にいへり大成按に古ハ熟田津といふのうまそこなりしがいつとなくあきたといふなれ古書に

もまた書よもいかゞ又行くべきなるの反歌よ飽田津と
ゆハ千蔭ゞ万葉略解よ飽ハ饒の誤なるべし又久老云或人其地
此様よ云なるよ考へハ饒田津とも飽田津とも今猶所
とぞ猶考へ所なるいまを飽ハ饒と字形似たれば寫誤りなる
ものなると或人の説ハ非也飽田津と云地名所なるよあれ又なるを
四津とも固りなるを此なるそハ〻の熟田津の熟を熟とも書
誤りなると見〻字を訂ぶ〻すりとハ訓誤りる者なるべし
三津濱人のいまらの山際まで昔ハ海なて此辺ハ築地なり
実よ考へなるべしさて三津の三ハ例の假字なて古天皇等
の行幸の時御船の泊し所なれハ御津といひを築地と成

なる海際なれハ今も御津ハいなるべし又熟田津石湯と所
名石ハ古書よ磯と通しなりとハ昔ハ温泉ゝの柔田津ち紀
遠よ在し又ハゝの山間の迫門なるを潮の満来く入江なる
しゝ古ゝ古書なるべの今世の地理よ所ぐきも國〻なれれ
なるもなれ考へ所なるし

○出雲岡神社

延喜式よ温泉郡出雲岡神社と所なる舊蹟考曰或書云
祭神稲田姫命也是素尊妃大己貴命母也俗號出雲御前
今西宮内有小社是也又一説三穂津姫大己貴命妃也云
御社ハ温湯の側冠山と云所よ立せる湯神社の傍なる小祠

よみあるを是なり

○湯神社

延喜式に温泉郡湯神社と称するは大己貴命少彦名命なり此社舊は温泉の東二町ばかり山際に立しを何世か出雲岡神の云せる冠山に遷奉りし舊地に小祠有て土人二神とす二神とは二柱の神を祭るなり

○伊佐尓波神社

延喜式に温泉郡伊佐尓波神社と称するは詳ならず御社は舊は伊佐尓波崗に云せりと今は湯月八幡宮の傍なる小祠に祭奉るを是なり

舊蹟考云祭神は健内宿禰大臣なりと社傳なれども或書云仲哀功后行幸なりし時宮を造りし所と今御カリヤ山と云其後二帝應神帝を併祀るは八幡宮と号し見る其外行幸の時の行宮は皆此森なる由云傳へと云

俚諺集曰或云石手寺住僧實秀法印と云人有り其弟子辨海後に參河国に行しと或人東武に往来の節彼辨海の行方を尋しに八十餘の老僧なる談話の序に道後に行くは岡と云江戸名所なり知るべしと云ふ岡と云ふ故に岡と云ふ故に世人等も知るべし便りに云ふ云ふれば伊佐尓波岡とは今は八幡宮の後柳木谷より古城の邊まで昔は山つゞき世とすべく

伊佐尓波岡と云て河野殿城を築し時山を穿き堀を引き故
今別の様なるその時まては八幡宮もこの山に在しを築城の時
ましく鐘楼の邊へ遷座し奉る小祠をもて奉幣信仰す
終に今古城竹林の中南の山端に在て俗岩崎権現と云伊佐尓
波の出崎に在しゆゑ庭崎と云ふ曳きを訛て岩崎と云習ふ
是八重跡の汚くも舊跡をなす迄に建る所社八即湯
月八幡宮なり伊佐尓波神社也湯月とも細川初湯築
と書とも俗に訛り仲哀天皇皇后と伴に行幸し
時新に御殿を造て行宮も行在所も云湯壺を構へ湯
を汲運し尓湯築と云とも湯月と書誤る行宮

の跡に社を建て伊佐尓波神社と崇奉る即仲哀天皇皇后
應神天皇三所なる山を御行山と云ふ畧して御行宮山と語り
伝き寛秀法印八其須八幡宮の別當なり故社傳委しく
覓て辨海に語傳らるるいつを
按此説に引けるゆゑを考訂して古の事を推
量ぬ為きなり
又の伊佐尓波と云名八万葉仙覧抄に引處の風土記云
時立湯崗側碑文慶謂伊佐爾波者富士諸人等其碑文
欲見而伊社那比來因謂伊社爾波也と云とも知難し

○湯月八幡宮

山城国石清水の宮殿を摸奉りて其壮厳の麗き事・葺の及所より〻寸抑此御社の原始詳ならず或云越智玉興十三代温泉郡司元興建立也と或云即伊佐尓波神社是也と

俚諺集云延久五年国司源頼義朝臣の命に依て河野親経八箇所八幡宮を建立寸當社も其一にして此時再建寸と云

按再建とゝば此時親経の建立せるハ〻ぎ〻ゝ

又云明應の頃河野家より再造育て刑部輔通宣より賜る

処の書面四通社長玉井某の家に傳らと云河野家代〻崇尊して和氣郡の内五拾石の神領を寄附せり河野断絶の後暫社領に放て社破壊して記録等紛失寸慶長八年加藤侯改城の後當社を鎮守と寸是より前喜明朝鮮征伐の時霊夢の告有て明日一戦に勝利を得敵の大艦数艘を打取武名を異域に揚ら於是喜明帰朝後社壇を建立〻神領百石を久米郡居合村に寄附せり

又寛文七年丁未春松山城主少将定長公神夢の告に依新に再建有り此時山城国石清水の壮觀を室殿回廊彫物三至まで寸分不違摸せ玉ふ処より〻今の宮殿是なり其時旗鎧弓矢太刀神馬等を神獻し奉り神領二百石を寄附し給へり

○湯月古城

俚諺集云河野九郎左衛門通盛任対馬守後入道して善恵と号

寸此後代〻住之堀二重ヨ構へ東西ヨ門有り城ハ東面也東ヨ富て
切抜門と云有、往古石手寺のつゝて夫より東ハ石手寺境内也と云
土居外回り五百廿間東城戸より西城戸まで六百六十間但し中道通り
同内回り四百六拾間本壇高四拾五間三尺東四拾九間南北十一間三尺
中壇東西五間南北三間杉壇高七間東西十二間南北四拾五間三尺也今ハ
大竹茂り二本の杉木残りて掻揚の小城趾也
城中ヨ岩崎權現社古ヨ此社舊河野氏の鎮守なりと元禄十
五年竹奉行安田又之丞義行と云人古城の南より拾得る神幣を
主〻〻再建せりと云此社の〻伊佐尓波神社の所ヨ委〻く誌〻
らず

豫章記、跋曰河野殿没落事者天正十五年也従太閤被仰付富田
民部殿拾万石大津居城御代官所拾万石也福島左衛門大夫
正則殿拾一万石湯月城居住御代官所九万石也後移國分城
以上十一年歟

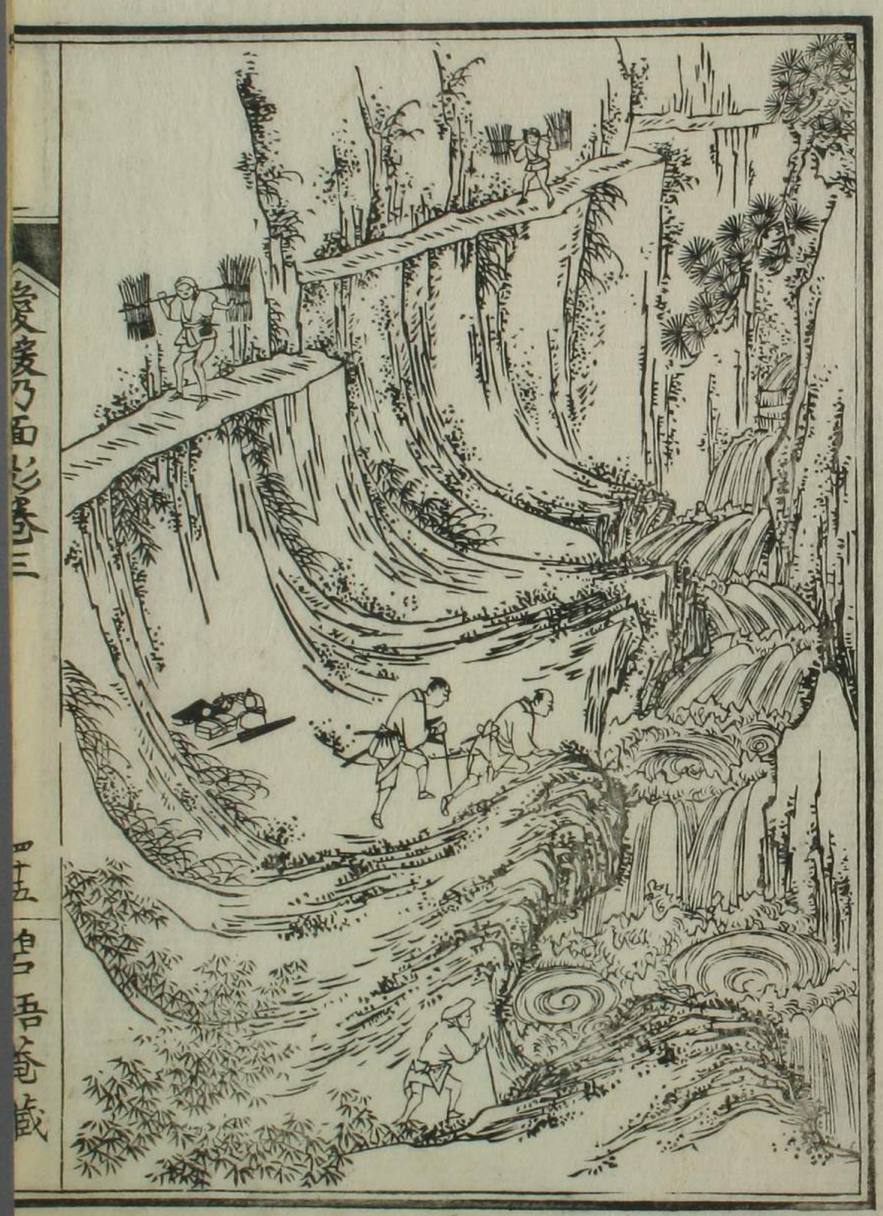
○義安寺

温泉の東南ヨ在り禅宗本尊薬師如来行基作河野景通子彦
四郎義安と云人の建立せし寺なれバ義安寺と名〻と云或曰此寺の
本尊石佛ヨて即聖德太子の碑を祭りて
俚諺集曰昔此寺を建んとて山より杣木数多出しる時此山ヨ續りる
湯山ヨり流ヨりし〻材木を下しるヨ涌が淵と云ふて水ヨ逆巻き

残らべ為底に沉めりまし土佐国に思議の材木多く流すぬれ上
るべば義安寺と号するを依て材の守護土佐に於て材木
もて一宇を建立し義安寺と名く其寺今猶存すと云
按此の怪談よりして因信ぐしれば西洋説に地中に
のづから溝渠有て水道を通ずるの恰も人身に経絡有
の如くしるべば此も亦ひとつの山脈にして流
出るか
又云天正十三年河野家断絶の時一族譜代の老臣ども二君
に事つらる此義安寺に於て神水を飲て誓約せりと云
傳へたりとぞ

○鷺谷寺
道後十六谷の内鷺谷と云ふに在て今八大禅寺と云本尊観世音
作者分明ならず大宮形と云銘有と云支那千畏禅師開基なり
山上に唐仏の観音を安置せり林下に井有り鷺井と名づく
名泉なり相傳古温泉此に涌出る時鷺の足片輪なるが常に
来て足を漬しよく程なる平愈しを仍て此名を鷺谷と
又右の山陰に小社有り二神社と云湯神社の舊蹟なり
○寶巌寺
道後十六谷の内奥谷に在て時宗一遍上人の開基なり本尊
上人自作の自像也と云

涌ぎ淵



二名集云一遍上人ハ別府七郎通廣次男勝壽丸越智通秀發心して號智真坊是時宗の祖也建治元年始遊行天下藤澤寺の開山よ〻て正應二年遷化也

俚諺集云此寺の開基一遍上人河野通信の孫通廣子也発心の始親族ゟ遺恨を挾む者有て殺害せんとしるゟ疵を蒙るに敵の太刀を奪取〻命を助るゝと云其後建治年中熊野ゟ參篭し神託を蒙〻諸國ゟ遊行するゟと始るゝと云

○三光田

其後温泉の西五六町樋股と云所ゟ〻川ゟ移り色ゟ〻南ゟ在り五月の頃田ゟ水を淦へ明日苗を植んと思ふゟ泥ゟ中殊ゟ澄る石有り熟視もゞ日月星の光を顯せゟ不思議ゟ〻ゟ思ひ〻耕作を止りゝと云と俚諺集ゟ見ゟ

按泥水中泉の涌出ゟ所ゟ〻れバ必速ゟ清澄すゟ〻ゟ涌出處ゟ日光映ずもゞ五彩の色を〻ゟ寺楠村旧井水日吉村僧都水等の類ゟ〻〻

○石手寺

石手村ゟ在り熊野山虚藏院と号す本尊藥師座像三尺五寸行基作四國順拜五拾一番札所ゟ〻

俚諺集云神亀五年戊戌歳越智玉澄建立する所也舊ハ大伽藍ゟて安養寺と名く共頃ハ法相宗ゟ〻と天長八年浮穴郡荏

原郷より右衛門三郎と云人有り利欲を貪り神仏を信ぜずして八人の男子續く頓死す八塚とて今猶存せり夫より家を捨て四國を順礼しなり阿波國焼山寺の禁下にて病死す一念願望を大師より誓ひて河野奥利の子興方生る時左手より一寸八分の石を握りて生れき石より文字有り曰右衛門三郎と是然り権現の申子なりとて寛平三年當寺を再建し熊野十二社権現を勧請し彼石を宝殿に藏く熊野山石手寺と稱す所真言宗より改めて云寺中什物書画類多し尊氏將軍の御教書有り其文曰

安養寺當知行地不可有相違之由國宣如件

元弘三年九月三日　　左衛門佐言上

昔八末寺六十六坊有りと今八保章院定觀院壇林坊新坊地藏坊等残れり

○繁多寺

畑寺村に有り本尊藥師如来長三尺仏基作四國五拾番札所也國司源頼義朝臣の命に依り河野親經四拾八箇所の藥師堂を建立せりその一なりと云

俚諺集云後宇多院弘安二年閏月勅命に依り蒙古退治の祈り丹誠を凝られば永仁二年鎌倉將軍下知狀両六波羅下文等を賜り仍て當國守護代に崇敬餘寺に起出す有識の高僧相續て住持し第七世快翁宗師洛陽泉涌寺二十六世の主盟にて

後小松院綸旨を帯し慶永元年當國より下向し入院開堂の昔
八七堂伽藍三十六坊在しと時移り物変りて殿堂悉く顛倒て
其旧蹟荒野となり草莽落壁敗て堂上より秋月をやどすのみ

○窪田天神社

窪田村に在り菅贈太政臣を祀る延喜の昔菅公太宰帥に流謫の下
せらるし時越智郡櫻井濱より船を寄せ夫より陸路此地に来り暫く
滞留せり玉ひし舊跡なりと云其時尤沓を脱捨玉ひしより依て此
所を沓脱と名く爰より流謫へ趣おもむきて名殘を今出と宣
しより今出濱と名くと俚諺集に見えたり別當長松山安楽寺と云
河野通元の寄附状なり其文曰

窪田安楽寺領并天神宮領の事

右當寺者神と云佛と云威名甚以厳重也幸任先祖代々下知し
旨無相違令寺務且可抽國家安泰之祈禱精誠者也仍
状如件

永正元年甲子八月廿五日　伊豫守通元

二字磨滅
○○院住持慶正禅師

此の数代の下知状多く紛失せり菅公所持の鶏硯四五年紛失せり
貞享二年乙丑初夏の頃別當不思議の霊夢有て土中より掘出
し硯形鶏鳥の如し宝永七年二月十八日社壇奏上し代々の
宝物等悉く焼失せり云

○大空城塁

齋院村岩子山ニ在テ大祝與三郎と云者細川頼之ニ属シ此城ニ籠リ此時南朝の御方ニ河野通朝世田城ニテ自殺シ其子徳若丸世田城ヲ落ク恵良城ニ入レ服シ通亮と名ク正平二十年正月廿六日温泉山ニ陣ヲ取合戦の事

豫章記ニ正月廿七日湯月山ヲ囲ミ攻ル程ニ細川天竺禅門以下大略自殺セラル其後大空ヲ攻ル城衆ハ大祝庄林國中ノ地頭御家人等ナリカヽル所ニ細川頼之大勢ヲ率テ道後ヘ打越ル通亮大空ノ攻口ヲ放メ高縄城ヘ楯籠ラルヽと見ル

南海治乱記ニ頼之ハ阿波ノ兵一万人ヲ以テ道後大空ト云処ニ三ヶ

テ陣ヲ居河野ガ與力ノ通路ヲ絶テ謀ヲ回ラスと云ふと

○山崎八幡宮

江戸山ニ在リ延文六年の造営ニテ願主修理亮平範有と云其後永應十九年久万式部亟通成再建すと俚諺集ニ見ル

○彌勒寺

此寺古ハ定額寺ニテ一国ニ幾寺と定ラレタルほどの大寺なれど今世絶ク所在を忘ル

春枝云食場村山中横谷と云所ニ弥勒寺山と名付ル處有大門又ハ弥勒堂毘沙門堂薬師堂など云所もなく即定額寺の跡なりつの頃ニ焼失て今ハ其名のみ残ルて彼薬師

堂八今石手寺中ゟ遷シ加藤喜朋朝臣城を松山ゟ築き給ひ
し時城山の東ゟ此毘沙門を遷祭ひる今横谷山毘沙門堂
ゝ成ぬ

類聚國史百八十佛道部曰天長五年冬十月伊豫国彌勒寺預定額寺
同七年九月庚辰以伊豫國温泉郡定額寺為天台別院
續日本後紀九卷曰天長七年九月庚辰以伊豫國温泉郡定
額寺為天台別院
按定額ハ續日本紀ゟ定武散位定額員二百人又續日本后紀
ゟ囚獄司物部定額四十人などゝて定數とゝ同意也
類聚國史百八十卷云天武天皇九年四月勅凡諸寺者自今

以後除為國大寺二三以外官府莫治とゝて〻官府ゟ治る処の
大寺を二箇寺若ハ三箇寺と定て是を定額寺と云るべし
伊豫國の定額寺ハ國分寺と此弥勒寺のゝて其ハ外の寺
ハをゝく國史ゟ載ゝと見ずれば諸寺の縁起ゟ勅願
所なるも多くハ私言なる歟

○長福寺

別府村ゟ在り本尊藥師毘沙門地藏三體ゝ行基作ゝと云
又聖德太子彫刻の不動明王空海筆不動画像唐土ゟ傳来の
両界曼陀羅等ゝて貞享の春始く開帳ゝり昔ハ脇坊十二箇
寺末寺十五ヶ寺有て河野通直の制れ今猶存すと俚諺集見ゝり

○真善院

齋院村山の林下に在り甲州武田信玄家臣真善坊と云僧田國にて法華経を廣む最澄自作の大黒觀音并身延山三代の曼陀羅を持来りて此寺を造立す其後退轉せしを享保年中道心小庵を結ひ住るゞ夢の告有て寺号を現ぬ夫より近村百姓の持傳る曼陀羅を返納したるより此寺の什物に相違なし因て元文の頃一宇を再建す大黒像は萱町妙圓寺に秘藏し觀音は針田瑞應寺にうつし俚諺集に見たり

○桑原八幡宮

畑寺村に在り累年の火災に社記燒亡して由来詳ならず天文十一年八月十五日河野通康再興の棟札ありと云

○正八幡宮

小栗村に在て用明天皇元年宇佐より勸請せりと云古今の社地より八町西方に馬場有て鳥居を立たり此辺の田地皆神領なりしを天正年中召放しより由荏原合戦の時賊社壇を破て社記宝物等悉く奪去て紛失せりと

○勝山八幡宮

今市町三宝寺境内に在り何の勸請なるやを詳ならず昔は城山の上に在りしを加藤侯築城の時北山の林下に移奉り其後又蒲生忠知朝臣當寺に移し玉ひしより由俚諺集に見たり

○井手大明神

橘村に在り俚諺集に云山州梅宮の勸請なるべし古は南方川向に在りと慶長三年今の所に遷座なり舊は五社明神と云

社僧は大音寺なり此寺は花山と号す高野山三昧院の末寺

にして本尊十一面觀音行基作大室年中の草創也と云

愛媛面影巻三終